

公共図書館の高齢者サービスにおける自分史づくり支援の意義と方法

齋藤 拓真

日本では世界に先駆けて高齢化が進んでおり、この傾向はこれからも続いていくと予測されている。

高齢化の進行に伴い、公共図書館においては来館者における高齢者の割合が増加していくと考えられる。公共図書館はこれまで、高齢者のニーズに応えるサービスを実施してきた。今後も高齢者を対象としたサービスの充実は求められていくだろう。

本研究の目的は、公共図書館における高齢者サービスとしての自分史づくり支援を検討することによって、公共図書館における高齢者サービスをより発展させることにある。自分史とは、一般人がつくる自叙伝を指す。

本研究ではまず文献調査を行い、公共図書館による高齢者サービスとしての自分史づくり支援の意義を考察する。文献調査の対象は、公共図書館の社会的役割や高齢者の精神的ニーズ、自分史づくりに関連するとする図書及び論文である。文献調査の結果、公共図書館における高齢者サービスとしての自分史づくり支援の意義は3つに分類することができた。ひとつ目は、公共図書館は情報サービスによって、自分史づくりの情報収集を支援することである。自分史づくりには過去の出来事や流行など、様々な情報が必要とされる。ふたつ目の意義は、自分史づくりそのものが「文化の保存・継承」に寄与することである。これは、図書館の活動目的のひとつでもある。自分史では、自身が生まれ育った地域の文化や歴史について綴られることが多い。三つ目は、自分史づくりが高齢者の「人生の振り返り」というニーズを満たすことである。心理療法などの分野において、高齢者は自身の過去を振り返る精神的ニーズをもつことが指摘されている。自分史づくりは、そのニーズに対応する高齢者サービスとして位置づけられる。

次に、公共図書館による情報サービスを中心とした自分史づくり支援の方法を考察した。はじめに、自分史づくりに関するマニュアル本の記述を分類することにより、自分史づくりに必要とされる情報を明らかにした。その後、それらの情報を提供する情報サービスを考察した。考察の結果、地域の昔の地図や写真などといった回想を促す資料の提供や、特定の時代の風俗に焦点をあてた展示施設などを対象とするレフェラルサービスを充実させることが必要であることが明らかになった。

高齢化が進む中、今後も公共図書館はより高齢者のニーズに沿った高齢者サービスを構成することが求められる。公共図書館による自分史づくり支援は、文化の保存・継承および高齢者の精神的ニーズへの対応という観点から、そのひとつとして意義のあるものだと考えられる。

(指導教員 呑海沙織)